

延岡市島野浦島の二拍名詞アクセント

坂口, 至
宮崎大学教養部講師

<https://doi.org/10.15017/10428>

出版情報 : 文献探究. 20, pp.52-58, 1987-09-26. 文献探究の会
バージョン :
権利関係 :



延岡市島野浦島の二拍名詞アクセント

坂口至

一 はじめに

宮崎県下の方言アクセントについては、今から五十年前程前、平山輝男氏の調査によって、北部の大分県に接する狭い地域に「東京式(豊前式)アクセント」、西南部の鹿児島県に接する地域(現在えびの市)に「西南九州二型アクセント」、都城市とその周辺に「統合(いわゆる尻上り)一型アクセント」が行なわれ、それ以外の広い地域は「崩壊一型(無)アクセント」であることが明らかにされているが、今後、

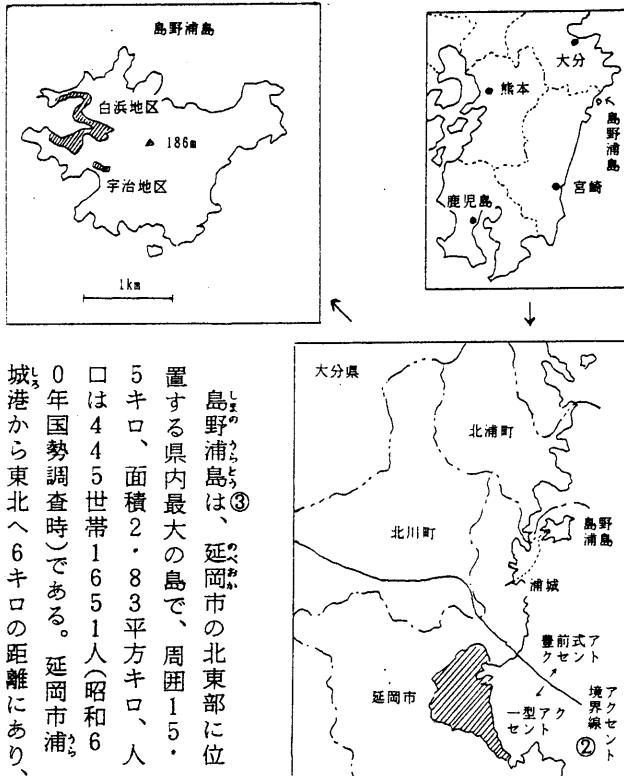
(1)それら以外のアクセント音調型をもつ、もしくは違った型の統合を実現している地域の有無

(2)それぞれのアクセント地域における、特に若年層のアクセントの共通語化

(3)この半世紀間のアクセント境界線の変化の有無など、調査すべき点が多い。

今回は、(1)に関して、「豊前式アクセント」が行なわれていると目される地域の一部に、それとは若干異なった型の統合を実現しているアクセントが存在することを、たまたま知る機会を得たので、とりあえず、その二拍名詞のアクセントを報告したいと思う。

二 延岡市島野浦島について



①が通っている。島民の98%は西海岸の白浜地区(白浜、奥納屋、地下、宇津木の各集落が密集して隣接)に居住し、少数が山一つ隔てた宇治地区(宇治)に住んでいる。島の70%が山林に覆われ、耕地、住宅地ともに0・2平方キロほどしかない。かなり人口過密な島といえる。島の産業は、かつては半農半漁であったが、現在

②島野浦島は、延岡市の北東部に位置する県内最大の島で、周囲15・5キロ、面積2・83平方キロ、人口は445世帯1651人(昭和60年国勢調査時)である。延岡市浦城港から東北へ6キロの距離にあり、所要時間20分一日9往復のフェリ

は漁業と水産加工業が大部分を占めている。

島に人が定住しはじめたのは江戸時代初め頃で、紀州和歌山や四国徳島からの移住者が多かったと伝えられている。^④

対岸の地域との交流は必ずしも盛んでなく、通婚関係も少なかったとのことである。

島内には小学校と中学校が一枚ずつあり、高校は延岡市街の学校に通っている。

昭和30年に、東臼杵郡南浦村から延岡市に編入され、島浦町となり現在に至っている。

三 島野浦島の二拍名詞アクセント

調査は、本年(昭和62年)3月と8月に、二拍名詞を中心に臨地で行なった。

調査方法は、用意した調査語彙表(漢字に共通語形の仮名を振り、五十音順に並べたもの)を当地生え抜きのインフォーマントに丁寧に読んでいただく、いわゆる「読む調査法」を採用した。

二拍名詞の調査語彙については、諸先学の研究を参照して、第一類〜五類に類別できる語をまず選び出し、それに若干の日常語を追加して、489語(一類139語、二類63語、三類137語、四類75語、五類45語、その他30語)とした。

インフォーマントには、高年層8名のほか、予備調査のために若年層1名をお願いした。

島野浦島の二拍名詞のアクセントは、高年層においては、かなり安定した姿で現われ、集落ごとの差異も見られないようである。

次に、河野茂彦氏(白浜在住、66歳)のアクセントを示してみる。

第三類	第二類	第一類
足明日網犬姐 襟冲鬼勝ち髪 菊岸茎櫛組尻 鮭炭墨芹谷月 土弟子時毒年 波後蚤海苔糊 恥鉢敷節堀幕 拵耳姪飯闌指 弓脇梓	歌石内垣紙杭 串箆蟬次弦梨 夏橋肘昼冬町 雪	婦風仮名此鯖 城其誰何処蠅 溝横嫁灰汁味 蟻牛海老甥甲斐 柿蟹徹株粥雉 傷君桐霧釘口 国首腰先鋤杉 滝竜塵釣鳥西 軒灰端蓮蜂菱 藤星舞右水道 虫初森槍百合 宵
垢麻穴家池芋 色腕敵馬裏親 龜喪皮際草糞 熊倉桑怪我苔 事米竿坂塩舌 島縞脛丈蛸柄 綱面泥繩糠沼 墓刷毛鳩花浜 腹骨胯豆店物 山夢綿	栗毬岩上音型 穀川癖鞍鹿下 為塚蔦棲寺供 旗機人胸村 余所	鮎烏賊磯魚梅 枝岡叔母顔籠 駕瘡金鐘壁釜 蚊帳暮欵籠手駒 胡麻薦酒笹里 絞皿品皺末裾 砂底袖鷹竹棚 壺爪艶床友虎 庭箱縁鼻羽根 幅髭膝暇紐笛 鱧蓋札筆臍 真似峰宮棟桃 床藪
海女綾泡肝雲 霜玉角唾猫晴 房矛孫室膿貝 鍵神靴栗恋匙 咳鯛太刀民塔 熨斗萩撥縁鞠 鞭樹脂	旅度虹文	芝蔘布稗鱸的 椅子鷲鈴筒

他	第五類	第四類
権式束樽肉熱 幹鷺 湯崖世話棘枇杷元雲丹餌斧癩独窠 湯氣 襪鉄茄子生服 富士豚風呂頰門 鰐	兄 琴股 藍青赤秋朝汗 虹雨鮎井戸嘘 桶牡蠣影鴨雁 黍蜘蛛黒鯉声 鮭猿白縦足袋 常露鶴鍋葱鱧 春蛭鮎蛇前窓 眉繭聾夜	乳咎他巽 跡尼粟息板市 何時糸稻今日 海瓜奥帯擢笠 糟数肩角鎌上 萱絹杵今日錐 脣管今朝桁下駄 此処鞘汁筋錢 隅其処外側蕎麦 空種父杖槌鏝 粒罪苗中何主 喉鑿箸肌母針 船紅籠松味噌 蓑麦宿薰我
○●▼ ○●▽ ○●▽	○●▽ ○●▽ ○●▽	○●▼ ○●▽ ○●▽

※●、○は、高音拍、低音拍を表す。また▼、▽は助詞()
 の場合はガ()の高音拍、低音拍を表す。
 ※傍線を付したものは、第一、三類の第二拍狭母音語。

二、三類にやや異例が多そうに見えるが、島野浦島の高年層のアクセントを、

○●▼	狭	一、二、三類	四、五類
○●▽	広		

(狭、広は第二拍狭母音語、広

母音語を示す)と見ることに、まず異論はないと思う。以下、各類ごとに若干の補足説明を行なう。

第一類では、第二拍広母音でありながら、○●▼に実現しているものが13語あるが、そのうち「此其誰蠅」の4語は、島野浦においては、「コリ、ソリ、ダリ、ハイ」という発音が普通であり、他の第二拍狭母音語に準じて考えてよいものである。その他の、「姉風鯖嫁」などは、各インフォーマントに安定した平板型であって問題を含む。○●▼の「藪」は、一、三類を通して唯一第二拍狭母音に核をもつ語であるが、当地における日常的発音が「ヤボ」であることを思い合わすべきである。○●▽に行なわれているもののうち、「椅子鈴」以外は非日常語が多そうである。

第二類では、「歌」が各インフォーマントに共通の平板型である。○●▽の諸語は、他の東京式アクセントの地域でも例外的に頭高に行なわれているもの(鯨門彼牙頃妻十虹姬文)と同時に非日常的な語が多い(他、同音語のアクセントに汚染されているようなもの(方)「肩」「旅度」「足袋」「下」「霜」)、非日常的な語(程八重故)、特有の方言語形をもつもの(痣)「クロジン」(など)等を振り落とすと、ほとんど問題が残らないのではないかと思う。

第三類では、○●▼に行なわれている語と○●▽に行なわれている語が、第二拍の母音の広狭によって截然と分かれており、一、二類以上に注意を惹く。例外的に○●▽に行なわれている語も多いが、二類の場合と同様の処理が可能である。上記のいずれの場合にもあ

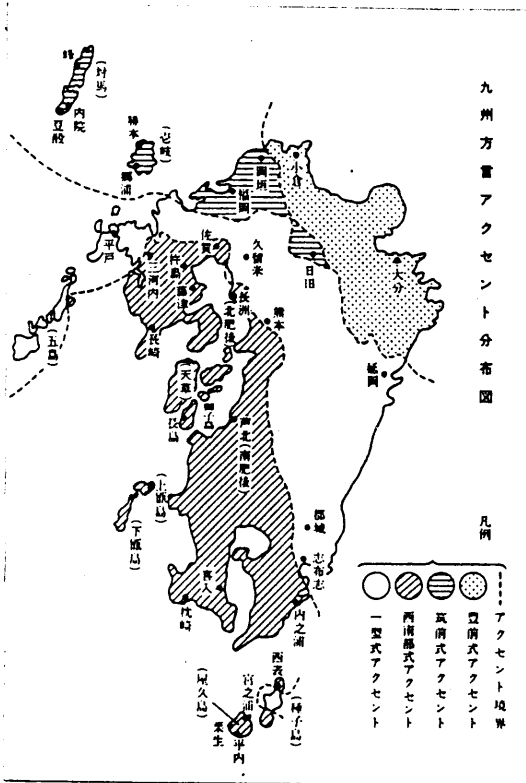
てはまらない、安定した当地固有のアクセントと思われるのは、「鍵肝栗角」など数語にとどまりそうである。

第四、五類には、ほとんど問題がない。五類の「兄琴股」は安定したアクセントであるが、それぞれ「姉事桃」のアクセントへの類推もしくは混淆によるものである^⑧。

四 島野浦島アクセントの位置

以上、島野浦島の二拍名詞アクセントの概要を見てきたが、ここで、このアクセントの性格について、周辺のアクセントと比較しつつ考えてみたいと思う。

あらかじめ、九州諸方言アクセントの分布図を、奥村三雄氏作製のもの^⑨を拝借して、次に示しておきたい。



まず、

●	○	○	○
▼	○	○	○
○	○	○	○

という型の統合、具体的音調のあ

りさまは、おそらく地理的にはもとも近いと考えられる「豊前式アクセント」の、

○	○	○	○
●	○	○	○
○	○	○	○

という姿と、二つの点で

大きく異なっている。一つは、「豊前式アクセント」で区別のある一二類と三類が島野浦島のアクセントでは統合してしまっていること、もう一つは、第二拍の母音の広狭で具体的音調の姿が二つに分かれる部分のあることである。これは、「豊前式アクセント」よりもむしろ、地理的には隔たったところに位置する「筑前式アクセント」の相によく似ていると言えそうである。たとえば、福岡市博多区などに

○	○	○	○
●	○	○	○
○	○	○	○

といったアクセ

ント（博多式アクセント）に近く、特に、対馬南部の豆酸^⑩という集落に見られる、

○	○	○	○
●	○	○	○
○	○	○	○

に実現するアクセント（「豆酸

式アクセント」）には、非常によく似ている。これら筑前式諸アクセントによく似たアクセントが、太平洋側にも存在するという新しい事実は注目に値すると思われる。もっとも、母音の広狭が音調型に影響するのは「筑前式アクセント」に限られるというわけでもない。大分県安心院町・院内町付近は、「豊前式アクセント」の地域内にありながら、

○	○	○	○
●	○	○	○
○	○	○	○

というアクセント相をもって

いるという。加うるに、島野浦島のアクセントが、「筑前式アクセント」よりも「豊前式アクセント」に似ている点がある。平板型に早

上がりの○●▼音調が安定的に存在することである。要するに、島野浦島のアクセントは、「豊前式アクセント」と「筑前式アクセント」の両方の特徴を合わせもつアクセントと言っているだろう。

そういえば、島野浦島のアクセントは、二拍名詞以外のアクセントでも「豊前式アクセント」と「筑前式アクセント」の中間的な性格をもっているようである。詳しくは別稿を用意しなければならぬが、おおまかに次のような特徴が見られる。

◎「豊前式アクセント」に似る部分

※一拍名詞に○▼(一二類)と●▼(三類)の区別がある。「筑前式アクセント」では●▼に統合。

※三拍名詞に二拍名詞と同様平板型○●●(▼)がある(「形」類と「頭」類。ただし、語末拍が狭母音の場合のみ)。

◎「筑前式アクセント」に似る部分

※二拍動詞は一二類の区別なく○●。「豊前式アクセント」では○●(一類)、●○(二類)。

※三拍動詞も一二類の区別なく○●○。「豊前式アクセント」では○●●(一類)、○●○(二類)。

※三拍形容詞も一二類の区別なく○●○。「豊前式アクセント」では○●●(一類)、○●○(二類)。

ともあれ、この島野浦島のアクセントと全く同じ内容のアクセントは、二拍名詞の場合に限っても、これまでまだ報告されたことがないようである。以後、「島野浦式アクセント」と呼ぶことが当然許されるだろう。

そこで、次に自ずから浮かんでくる興味は、この「島野浦式アクセント」が、どのような経緯をへて現在の形に出来上がったかという系譜の問題であるが、これについては、もっと様々の事柄を明らかにした上で総合的に考えられるべきである。たとえば、島野浦島

の住民の歴史が一層明らかになれば、その言語の問題にも寄与するところが大きくなると思われるし、「島野浦式アクセント」が島野浦島に限らず、対岸の九州内陸部にも行なわれているようなことがもしあれば、《島》のアクセントの特異性よりも、「豊前式アクセント」や「筑前式アクセント」との関係が重んじられよう。

いずれも今後の精査に待たなければならぬが、二拍名詞に限っていえば、幸い全国的な系譜論が盛んであるし、九州だけに限っても様々な系譜論の試みが既になされている^⑩。まさに食指が動くわけで、この小論を、二拍名詞の系譜の見通しで閉じたいと思う。

「島野浦式アクセント」の二拍名詞の系譜は、おおよそ三通りの道筋が考えられようである。そのうち初めの二つは、地理的近縁性もしくはアクセント内容の近縁性から説くもので、系譜論の常道と見られる。まず、地理的近縁性から言えば、「豊前式アクセント」から

変化したものと考えるのが当然である。が、

○	一二類
●▼	三類
○	四五類
○	四五類

という「豊前式アクセント」の姿から、中間過程をある程度経ないで、

○	一二類	三類	四五類
●▼	狭	広	狭
○	○	○	○
○	○	○	○

という「島野浦式アクセント」を導くのは難

しそうである。ここで、参考になるのは、既に紹介したが、

○	一二類	三類	四五類
●▼	狭	広	狭
○	○	○	○
○	○	○	○

に行なわれている「院内(安心院)式アクセ

ント」で、これは「豊前式アクセント」から直接変化したものと考えられる。このアクセントの特徴は、第三類が第二拍の母音の広狭でアクセント音調型が二色に分かれていることであるが、「島野浦式アクセント」も、かつてこの変化を被り(音調型は違った方向に動いたが)、

○	一二類	三類	四五類
●▼	狭	広	狭
○	○	○	○
○	○	○	○

のような(旧島野浦式アクセ

ト)を経て、現在のようなアクセントに至ったのではないか。この場合、第三類の第二拍狭母音語が、当該拍にアクセント核を担い得ず、○●▼に変化するものは、一二類語にもともと存在する型であることも手伝って難しい変化ではないが、第一、二類広母音語が、○●▼から○●▽に変化するものは、アクセント型の内的変化としては自然とは言えず、二拍名詞アクセントの体系内で、他の、すなわち第三類の型への類推ということを考えねばならない点、若干の問題を含むと言えよう。なお、この考え方を、幾分か補強すると思われるのは、先に触れるところのあった、第一、二類の第二拍広母音語の中に、「姉風鯖嫁歌」など、少数ながら安定的に○●▼に実現するものがあるという事実で、これは、第一、二類諸語がかつてすべて○●▼であった時代の名残りとして理解できはしないだろうか。もっとも、次の第二案で述べるような別の解釈も可能である。

系譜の道筋の第二は、アクセント内容の近縁性から説くもので、これも先に触れたが、筑前式諸アクセントの中でも、

一二三類	四五類
狭	広
○●▼	○●▼
○●▼	○●▼

に実現し、「島野浦式アクセント」と酷似し

ている対馬「豆酸式アクセント」の系譜の列に位置させようとするものである。諸先学が推定しておられるように、この「豆酸式アクセント」の出自アクセントの姿は、呼称は様々であるが、

一二三類	四五類
○●▼	○●▼

に行なわれていたと考えられる。「島野浦式アクセント」は、まさにこの嗣子アクセントではないのか。「豆酸式アクセント」は、「島野浦式アクセント」のさらに一時代後のアクセント

か、同一の親から生まれた兄弟アクセントと考えられる。なお、第一案で述べた、第一、二類に見られる第二拍広母音語の○●▼の異

例は、この道筋を考える立場からは、「島野浦式アクセント」成立後の、近接する「豊前式アクセント」からの部分的影響によるものと解釈される。

以上の、二つの系譜案は、いずれにしても「島野浦式アクセント」が「豊前式アクセント」から分かれたものと推定する点で共通している(筑前式アクセント)が「豊前式アクセント」の後裔であるという通説に従えば)が、第三の道筋は、島野浦島の歴史やアクセント以外の言語の特異性を予想して、「豊前式アクセント」以前の姿からの分岐を考えようとするものである。アクセント型の統合状態などを考えると難しそうであるし、実際今のところ何ら成案を持ち合わせていないが、今後の調査によっては不可能でなくなるかもしれない。

五 おわりに

宮崎県北端の海上に浮かぶ延岡市島野浦島に行なわれているアクセントが、二拍名詞の場合、一二三類／四五類という型の統合状態にあり、母音の広狭がアクセントを動かす特徴をもちながら、安定的な平板型○●▼をも有するという、「筑前式アクセント」と「豊前式アクセント」の特色を合わせ持つ独自のアクセントであるということを示す。今後、中でいさか触れることのある二拍名詞以外の種々のアクセントのほか、当該アクセントでもやはり免れることの出来ない若年層のアクセント共通語化の問題など、引き続き調査し、平行して、アクセント以外の方言事項についても考察を怠らぬよう努めて行きたいと思う。

【注】

- ①「九州方言音調の研究」(学界之指針社、昭和26年)にまとめられている。
 ②平山氏「九州方言音調の研究」165ページ以下を参照して、私に引いてみた境界線である。
 ③以下、「角川日本地名大辞典45 宮崎県」(昭和61年)、「しまんだ(島野浦)」(島野浦中学校編 昭和59年)、「離島調査報告書—島野浦の歴史と民俗—」(宮崎県総合博物館編 昭和49年)などを参照した。
 ④島には、讃岐屋・備前屋・播磨屋などの屋号をもつ家があるという。島野浦が、江戸時代に瀬戸内・薩摩航路の中継地であったことも考え合わせられる。
 ⑤金田一春彦氏「国語アクセントの史的研究 原理と方法」(塙書房、昭和49年)63〜65ページや、奥村三雄氏「平曲講本の研究」(桜楓社、昭和56年)263〜264ページなどに拠った。もっとも、この類別は、語によってはかなり無理をしてはめ込んだものがある。なお、その他の語は「九州方言音調の研究」から引いたものが多い。ひとえに、近隣アクセントとの比較の便を考えてのことである。
 ⑥「ガ」以外の助詞がつく場合のアクセントも若干調べてみた。「ガ」に同じなのは「ハニモ」などであり、「ノ」(属格)は、一〜三類ともに母音の広狭関係なく○●▼の平板型に実現し、四五類は●○▽。その他、「カラ」の場合、一〜三類狭母音で○●▼に、広母音で○●▽▽に実現し、四五類は●○▽▽。シカ(限定)の場合、一〜三類ともに母音の広狭関係なく○●▽▽に実現し、四五類は●○▽▽、などとなっている。
 ⑦今回は各インフォーマントによってアクセントにゆれの見られる語について細かく検討する事を省略した。ゆれの見られる語は、全体として見ればわずかと云ってよく、アクセント体系の議論に影響を与えないものと判断している。
 ⑧以上、金田一氏「国語アクセントの史的研究」98ページ以下の「アクセントの形態的变化」に関する記述など、特に参考になった。
 ⑨「九州諸方言アクセントの系譜」(九州文化史研究所紀要23、昭和53年)参照。
 ⑩以下、九州東北部のアクセントについては、平山氏「九州方言音調の研究」、金田一氏「対馬 附巻岐のアクセントの地位」(「日本の方言」(教育出版、昭和50年)所収)、奥村氏「九州諸方言アクセントの系譜」、添田建治郎氏「秋市見島の方言アクセントをめぐって」(「国語学」48、昭和62年)、その他の方々の論文を参照

した。

- ①注⑩の諸論文のほか、徳川宗賢氏「日本諸方言アクセントの系譜」(試論)(学智院 大学国語国文学会誌6、昭和37年)が特に参考になった。
 ②奥村氏「対馬方言の性格」(九州文化史研究所紀要18、昭和48年)によれば、「豆敷式アクセント」の一〜三類の第二拍狭母音語は○●▼に発音されることもあるようで、そうすると「島野浦式アクセント」とほとんど同じものになる。
 ③注⑩の諸論文参照。

「付記」

※この度の調査に際しては、インフォーマントその他として、次の方々に御協力いただきました。記して深謝いたします。(順不同)
 河野茂彦氏、結城宗一郎氏、長野肇十郎氏、井戸口スミ子氏、山本留義氏、三島好景氏、児玉弥一郎氏、木田フクエ氏、松田喜穂氏(以上島野浦)、貫徳重氏、織田豊市氏(以上延岡市役所)。

※小稿は、第63回筑紫国語学談話会(昭和62年3月28日、於熊本大学)での発表に基づき、その後補訂を施して成ったものである。談話会席上、および私信にて御教示たまわった会員の方々に感謝します。

宮崎大学教育学部講師